

[Report]

Evaluation of the adviser-system by students in a college

Takumi Ogata*

* Aino Gakuin College

Abstract

The adviser-system to support students has been adopted since our nursing college was founded. The role of advisers is expected to respond to the students who have various problems on their student lives, to give information on school records and to instruct them individually.

In the present study questionnaires were given to the students, from the first to the third year, to find their actual conditions and expectation to the adviser-system. The results were the following : More than 80% of the students considered that they needed the adviser-system, although more than 70% of the students did not utilize the adviser-system actively. The reasons why the students did not fully utilize this system were mainly because when the students needed advice, they did not find their adviser teachers in the campus or they felt that the teachers looked too busy to respond to the students. Thus, the students' real situation was: first, when the students needed advisers, they consult their friends and parents ; second, the students select other teachers than their adviser teachers ; third, the students accordingly seemed to look for intimate relation with their adviser teachers.

Key words : adviser-system, nursing student, adviser

学生による本学のアドバイザー制度の評価

緒 方 巧*

【要 旨】 本学は、開学時より学生への支援として、アドバイザー制度を実施してきた。アドバイザーの役割は、学生生活の諸問題に対して相談にのりアドバイスを与えたり、学業成績に関する情報提供や個別指導を行うなどである。

今回、アドバイザー制度に対する学生の活用の実態と期待内容を明らかにするために、1年生から3年生までの在校生を対象に質問紙調査を行った。その結果、70%以上の学生がアドバイザー制度を積極的に活用していないにもかかわらず、80%以上の学生がアドバイザー制度の存続やアドバイザー教員を必要としていることが示された。

活用度が低い理由として、青年期にある学生にとって最も身近なサポーターは友人や親であること、またアドバイスを必要とした場合、自分のアドバイザー教員でなく他の教員に相談することなどが明らかになった。さらにアドバイザー教員には、親しみやすさなどの心理的配慮や積極的な関わりを求めていることが示された。

キーワード：アドバイザー制度、看護学生、アドバイザー教員

はじめに

看護学生はその大半が青年期にある。在学中の3年間は膨大な専門知識の習得とともに、臨床実習においては看護体験を通して様々な人々と出会うことで人間的な成長を遂げていく。しかし、その過程にはエリクソンのいう発達課題としての自我同一性の形成や看護者としての職業同一性の形成などの課題も多く、ストレスを感じやすい状況に多々遭遇する。心身ともに揺れ動きつつ成長しようとする学生をいかに支援し望ましい方向に育成していくのか、教育環境のひとつである教員は重要な役割を担っている。

本学は開学時よりアドバイザー制度を設置し実施してきた。学生への支援として、学生部、健康管理室、心理相談室が機能しているが、現在までアドバイザー制度に対する学生からの評価は得ていない。また、看

護系大学や看護専門学校の学生に関するストレス調査や生活の実態調査に比較して、学生支援のひとつであるアドバイザー制度に関する調査報告はごくわずかしかない(神谷和世ら, 1996)。

医療や社会の変化に対応すべく看護教育のカリキュラムも改正されてきたが、学生を取り巻く社会環境の変化にもなって学生の傾向性も変化してきている。これらの状況を考慮すると、開学時より実施してきた本学のアドバイザー制度のあり方についても再度検討していく時期にきているのではないかと考える。本調査研究は本学のアドバイザー制度(表1)に対する学生の活用の実態と期待内容を明らかにすることを目的として行った。今回の調査は在籍学生(1997年度～1999年度入学生)による評価ではあるが、本学の今後の学生支援のあり方を検討し充実させるための考慮に値する結果を得たので報告する。

* 藍野学院短期大学

表1 本学のアドバイザーの役割規定

| |
|--|
| <p>1) アドバイザーは、学長の命を受けて専任教員がその任に当たる。</p> <p>2) 1人のアドバイザーは、原則として学生15名を受け持ち、入学から卒業まで継続して担当する。</p> <p>3) アドバイザーの役割</p> <p>(1) 学生から学生生活の諸問題に対する相談にのり、アドバイスを与える。1・2年次は、生活面と学習面、3年次はさらに就職・進学などの問題について、アドバイスをする。</p> <p>(2) アドバイザーは、科目担当者や他の教員と連携をとり、必要時は学生を呼びだし、面談をする。</p> <p>(3) 学業成績の情報提供や個別指導を行う。</p> <p>(4) 看護婦国家試験模擬試験の実施を担当する。</p> <p>(5) 新入生課外研修時は参加し、競技や分科会を通して学生と交流をはかる。</p> |
|--|

結 果

1. フェイスシート

学生の「生活状況」は、1年生では「家族との同居」が57.5%と半数を超えるが学年が進むにしたがい、「1人暮らし」が2年生では50.6%、3年生では48.4%と「家族との同居」を上回っている。「サポートを必要とした時に誰にヘルプを求めているか」という問いについては、表3に示すとおり全学年ともに「クラスメート」が最も多く、次いで「親」「恋人」「きょうだい」「異性の友人」の順に多く、「教員」は少なかった(表3)。

2. アドバイザー制度の活用

1) 「アドバイザー制度をどの程度活用したか」

全学年ともに70%～90%の学生が「あまり・ほとんど」活用していない。その主な理由を自由記述からみると、1年生では、「アドバイザー教員と接する機会がなく親しくない」、「アドバイザー教員のことをよく知らない」、「話したことがないから話にくい」など、教員との関係を理由にしたものが、自由記述回答79項目中23項目(29.1%)で最も多かった。次に、「活用するような相談ごとがなかった」18項目(22.8%)、「親やきょうだい、友人との間で解決できた」18項目(22.8%)、その他として「活用方法が分からなかった」、「アドバイザー制度を忘れていた」などで、記述なしは3項目(3.8%)であった。

2年生では、「一度行ったとき素っ気なかったから」、「接触する機会がなく人間関係が築けていない」、「話にくい教員だったから」、「相談したい教員がアドバイザーではない」、「自分の選んだ教員に相談したから」など、教員との関係を理由にしたものが自由記述回答66項目中20項目(30.3%)、「特に相談することがなかった」20項目(30.3%)、その他として「活用方法が分からなかった」、「友達同士で解決できた」などで記述なしが24項目(36.4%)と多かった。

3年生では、「話をする機会がなかった」、「頼りになるとも思えない」など、教員との関係を理由にしたものが自由記述回答46項目中16項目(34.8%)、「成績を取りに行くだけで特に相談することがなかった」など、活用する理由がなかったとするものが12項目(26.1%)、その他として「活用の仕方が分からない」、「他の教員や友達で解決できた」などで記述なしは13項目(28.3%)であった(表4)。

方 法

1. 調査対象と回収率

1年生(15期生)88名(男子学生5名を含む)、2年生(14期生)88名(男子学生4名を含む)、3年生(13期生)78名(男子学生0名)に対し実施した結果、回収率は、1年生が87名(98.9%)、2年生が83名(94.3%)、3年生が62名(79.5%)であった。

2. 調査期間と方法

平成12年1月27日から2月10日の間に次の方法で調査を行った。すなわち、1・2年生は後期の授業終了後に各教室で質問紙による調査を実施した。また、3年生は1月から2月にかけて実施した国家試験対策勉強会の終了後に同様に実施した。調査に際しては個人のプライバシーを保護するとともに、調査に対する防衛機制を低減させるために無記名とした。さらに記入後は添付した封筒に学生が直接密封する方法とした。

3. 調査内容

1) フェイスシート4項目 2) アドバイザー制度の活用について7項目 3) アドバイザー教員について6項目、計17項目とし、肯定的回答、否定的回答にそれぞれ理由を問う自由記述欄を設けた(表2)。

4. 分析方法

単純集計結果およびクロス集計結果と自由記述内容との関連性を検討した。

表2 アドバイザー制についての調査

I. フェイスシート

- 年齢 1) 20歳未満 2) 20歳以上
- 現在の同居者 1) 1人暮らし 2) 他人と同居 3) 家族と同居 4) その他
- サポートを必要としたときにヘルプを求める人は誰ですか
1) 親 2) きょうだい 3) クラスメート 4) 異性の友達 5) 恋人 6) 教師 7) 先輩 8) その他
- あなたのアドバイザーは1年間同じでしたか
1) 同じだった 2) 途中で変更した 3) 変更した理由は何でしたか 4) 変更したことで困ったこと

II. アドバイザー制度について

以下の設問1, 4, 6, 7, については肯定的・否定的回答についての理由を自由記述で記入

- この1年間、アドバイザー制度をどの程度活用しましたか
1) とても活用した 2) まあまあ活用した 3) あまり活用しなかった 4) ほとんど活用しなかった
- アドバイザーはどのようにすることで必要だと感じましたか
1) 健康 2) 人間関係 3) 経済面 4) 勉強 5) 実習 6) 進路 7) その他
- アドバイザー教員あるいは他の教員からの支援の必要性を感じたときはどの時期でしたか
1) 入学直後 2) 入学してから夏休みまでの期間 3) 1年生の後期 4) 2年生の前期
5) 2年生の後期 6) 3年生の前期 7) 3年生の後期
- アドバイザーとコンタクトをとりたい時タイムリィにとれましたか
1) とてもとりやすかった 2) とりやすかった 3) どちらかというとりにくかった 4) とてもとりにくかった
- アドバイザーと面談する際の場所は適切でしたか
1) 適切だった 2) まあまあ適切だった 3) 適切でなかった
- 現在は、入学時に学校側がアドバイザーを決定していますがこれについてはどう思いますか
1) 現在の方法でよい 2) 現行どおり決定していてもよいが学生が必要に応じて他の教員のところへ行けばよい
3) アドバイザーは学生が選択し決めるほうがよい 4) 学年毎にアドバイザーを変えたほうがよい 5) その他
- アドバイザー制度は必要だと思いますか
1) とても必要 2) ないよりはあったほうがよい 3) なくてもよい 4) 必要ない

III. アドバイザー教員について

以下の設問2, 3, 4については否定的回答についての理由を自由記述で記入

- アドバイザーはあなたの相談や期待にどの程度応えてくれましたか
1) かなり 2) まあまあ 3) 少し 4) まったく
- アドバイザーとの関係で困ったことはありましたか
1) ほとんどない 2) あまりない 3) ある 4) 多くある
- アドバイザーのところへ行くことはあなたにとってどうでしたか
1) まったく抵抗はなかった 2) あまり抵抗はなかった 3) 少し抵抗を感じた 4) かなり抵抗を感じた
- アドバイザーとの人間関係はどうでしたか
1) とてもよかった 2) よかった 3) 普通だった 4) 希薄だった 5) 悪かった 6) とても悪かった
- アドバイザー教員と他の教員とではどちらがより多くあなたのサポートになりましたか
1) アドバイザー 2) 他の教員
- アドバイザーは積極的に接触の場をつくってくれましたか
1) とてもよくつくってくれた 2) まあまあつくってくれた 3) あまりつくってくれなかった
4) ほとんどつくってくれなかった

表3 サポートを必要としたときにヘルプを求める相手 (複数回答)

| | 1年生 (n=87) | 2年生 (n=83) | 3年生 (n=62) |
|--------|------------|------------|------------|
| 親 | 61 (70.1) | 41 (49.4) | 40 (64.5) |
| きょうだい | 23 (26.4) | 12 (14.5) | 11 (17.7) |
| クラスメート | 72 (82.8) | 67 (80.7) | 46 (74.2) |
| 異性の友人 | 19 (21.8) | 9 (10.8) | 2 (3.2) |
| 恋人 | 26 (29.9) | 32 (38.6) | 24 (38.7) |
| 教師 | 9 (10.3) | 5 (6.0) | 2 (3.2) |
| 先輩 | 8 (9.2) | 6 (7.2) | 2 (3.2) |
| 後輩 | 2 (2.3) | 1 (1.2) | 0 (0) |
| その他 | 18 (20.7) | 15 (18.1) | 11 (17.7) |
| 無回答 | 0 (0) | 0 (0) | 1 (1.6) |

() 内は%

2) 「アドバイザーを必要とを感じる時」

設問項目「勉強」、「進路」、「実習」、「人間関係」、「健康」、「経済」、「その他」の7項目中、全学年ともに「勉強」61.4%～75.9%、「進路」71.0%～73.6%、

表4 学生によるアドバイザー制度の活用度

| | 1年生 (n=87) | 2年生 (n=83) | 3年生 (n=62) |
|----------|------------|------------|------------|
| とても・まあまあ | 8 (9.2) | 16 (19.2) | 16 (25.8) |
| あまり・ほとんど | 79 (90.8) | 66 (79.5) | 46 (74.2) |
| 無回答 | 0 (0) | 1 (1.2) | 0 (0) |

() 内は%

「実習」35.0%～45.2%と上位を占めている。1年生では、「勉強」、「進路」、「実習」の順で2年生、3年生では「進路」、「勉強」、「実習」の順になっている。そのほか、「人間関係」は、3年生時と1年生時に24.2%～26.4%とアドバイザーを求める傾向がみられ、「健康面」は1年生時に19.5%と多かった。

3) 「アドバイザーを必要とした時期」

1年生は「後期」が最も多く36.8%、次いで「入学直後」34.5%であった。2年生は「2年生の後期」が

最も多く41.1%，次いで「1年生の後期」15.7%であった。3年生は「3年生の前期・後期」がいずれも高く54.8%であった。

4)「入学時に大学側がアドバイザーを決定していることについてどう思うか」

表5に示すとおり、「現行のままでよい」とする学生は1年生は24名(27.6%)，2年生は14名(16.9%)，3年生は19名(16.1%)であったのに対して、「現行どおり決定していてもよいが，学生が必要に応じて自由に他の教員のところへ行けばよい」，あるいは「アドバイザーは学生が選択し決めるのがよい」という意見が全学年とも50%を超えた(表5)。

これに関連して、「入学時に大学側がアドバイザーを決定していることで困ったこと」についての自由記述内容では，1年生は記述者18名(21.0%)で「知らない人で困った」，「話しにくかった」，「あまり親しみをもてない」，「知らない教員に相談するのは気が引ける」，「もう少しどんな教員なのかを知ってから選びたい」など，アドバイザー教員との関係作りをあげていた。

2年生は記述者12名(14.0%)で「他に話しやすい教員がいてもいけない気がする」，「自分が親しく思

える教員の方が話しやすかった」「アドバイザーによって関わりかたの差が大きすぎるので面接を年に何回かすると決めてほしい」など，自分が求めるアドバイザー像と担当教員との葛藤を述べている。

3年生は記述者13名(21.0%)で「他の教員に相談しにくい」，「教員によって看護に関するアドバイスがもらえない」，「アドバイザーの専門と自分の相談事が異なる」，「アドバイザーが変更になったときに困った」など，具体的な相談内容と教員の専門性とのギャップをあげていた。

5)「アドバイザー制度は必要か」

全学年とも「ないよりはあった方がよい」とする学生が50%を超えており，「とても必要」を加えた必要性肯定群は全体の80%を占めていた(表6)。

活用度と必要性の関連を学年別にみると，表7～9に示すとおり，「あまり，まったく活用していない」群でも1年生85.0%，2年生90.2%，3年生84.8%の学生が「ないよりあったほうがよい」，「とても必要」と答えた(表7～9)。必要とする理由として，

1年生は，「今は必要としていないが進路や国家試験の時に相談できる教員がいた方がよい」，「活用していないがいざというとき立ち寄る場がある」，「担当のアドバイザーがいるというだけで安心できる」が主な回答で，その他，「困ったときに相談できるのは教員

表5 大学側がアドバイザーを決定していることについて(複数回答)

| | 1年生 (n=87) | 2年生 (n=83) | 3年生 (n=62) |
|----------|---------------|---------------|---------------|
| 現行でよい | 24 (27.6) | 14 (16.9) | 19 (16.1) |
| 現行プラス自由 | 38 (43.7) | 44 (53.0) | 34 (54.8) |
| 学年毎に担当変更 | 5 (5.7) | 3 (3.6) | 3 (4.8) |
| 学生による選択 | 21 (24.1) | 24 (28.9) | 16 (25.8) |
| その他 | 3 (3.4) | 4 (4.8) | 1 (1.6) |
| 無回答 | 1 (1.1) | 0 (0) | 2 (3.2) |

()内は%

表6 アドバイザー制度は必要か

| | 1年生 (n=87) | 2年生 (n=83) | 3年生 (n=62) |
|---------|---------------|---------------|---------------|
| とても必要 | 31 (35.6) | 22 (26.5) | 10 (16.1) |
| あった方がよい | 44 (50.6) | 45 (54.2) | 45 (72.6) |
| なくてもよい | 9 (10.3) | 11 (13.3) | 1 (1.6) |
| 必要ない | 3 (3.4) | 4 (4.8) | 4 (6.5) |
| 無回答 | 0 (0) | 1 (1.2) | 1 (1.6) |

()内は%

表7 1年生におけるアドバイザー制活用度と必要性との関連

| 活用度 | 必要性 | アドバイザー制は必要か | | | | | 総計 |
|-----|---------|-------------|--------------|----------|---------|-------|----------|
| | | とても必要 | ないよりあったほうがよい | なくてもよい | 必要ない | 無回答 | |
| 活用度 | とてもまあまあ | 6 (75.0) | 2 (25.0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 8 (100) |
| | あまりほとんど | 25 (32.0) | 42 (53.0) | 9 (11.0) | 3 (4.0) | 0 (0) | 79 (100) |
| | 総計 | 31 (36.0) | 44 (51.0) | 9 (10.0) | 3 (3.0) | 0 (0) | 87 (100) |

()内は%

表8 2年生におけるアドバイザー制活用度と必要性との関連

| 活用度 | 必要性 | アドバイザー制は必要か | | | | | 総計 |
|-----|---------|-------------|--------------|-----------|---------|---------|----------|
| | | とても必要 | ないよりあったほうがよい | なくてもよい | 必要ない | 無回答 | |
| 活用度 | とてもまあまあ | 10 (75.0) | 6 (25.0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 16 (100) |
| | あまりほとんど | 12 (32.0) | 39 (58.2) | 11 (16.4) | 4 (6.0) | 1 (1.5) | 67 (100) |
| | 総計 | 22 (26.5) | 45 (54.2) | 11 (13.3) | 4 (4.8) | 1 (1.2) | 83 (100) |

()内は%

表9 3年生におけるアドバイザー制活用度と必要性との関連

| 活用度 | | アドバイザー制は必要か | | | | | 総計 |
|-----|---------|-------------|-----------|--------------|----------|---------|----------|
| | | 必要性 | とても必要 | ないよりあったほうが良い | なくても良い | 必要ない | |
| 活用度 | とてもまあまあ | 5 (31.2) | 11 (58.8) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 16 (100) |
| | あまりほとんど | 5 (10.9) | 34 (73.9) | 1 (2.2) | 5 (10.9) | 1 (2.2) | 46 (100) |
| | 総計 | 10 (16.1) | 45 (72.6) | 1 (1.6) | 5 (8.1) | 1 (1.6) | 62 (100) |

()内は%

だから」,「相談事は年長者の教員に聞く方がうまくいくことが多い」などを記述していた。

2年生は、「心の支えになる」,「友達に相談しにくいこともあるから」,「いざという時のために」などアドバイザー制度に安心感を求める記述をしていた。

3年生は、「教員のことを知らない時期には行くのがあってよい」,「自分から教員を選べない学生もいるから行きやすくなるし、教員も気にかけてくれる」,「教員との距離が近くなる」など体験にもとづいた助言的記述をしていた。

一方、「必要ない」とする回答者の理由として

1年生では、「活用することがなかった」,「親しく感じる教員のところへ行く」,「忙しそうで気の毒」,2年生では、「活用していないが困らない」,「必要なときに自分で教員を選んで行けばよい」,「進学・就職の時しか必要ない」,「学生が必要と感じる時に全教員が対応できるようになれば、アドバイザー制度そのものはなくても良い」,3年生では、「活用しなかったから」,「成績の返却だけなら郵送だけでもよい」という記述をしていた。

3. アドバイザー教員について

1)「アドバイザーは相談や期待にどの程度応じてくれたか」

「かなり・まあまあ応じてくれた」と受け止めている学生は、1年生37名(42.5%),2年生26名(31.4%),3年生31名(50.0%),「少し、まったく応じてくれなかった」と受け止めている学生は1年生35名(41.3%),2年生37名(44.6%),3年生28名(45.2%)であった。

2)「アドバイザーのところへ行くときに抵抗感があったか」

全学年ともに半数のものが「まったく・あまり」抵抗感を感じていなかった。

3)「アドバイザーとタイムリィにコンタクトがとれたか」

全学年とも「とりにくかった・とてもとりにくかった」と回答している。全学年に共通して、「とりにく

かった理由」として最も多かったのは、「教員の所在が分からない」,「いつ行けばいいのか教員の在室時間が分からない」,「不在が多い」で、1年生は記述者52名中20名(38.5%),2年生は記述者37名中12名(32.4%),3年生は記述者44名中12名(27.3%)であった。その他として、「忙しくしている」,「親近感がなく悩みでもないし近寄りやすい」,「話しにくい」,「部屋に行きにくい」と記述していた。

4)「アドバイザーが積極的な接触の場をつくってくれたか」では全学年ともに54.8%~67.4%と半数以上が「あまり・ほとんどなかった」と答えた。

5)「アドバイザーの教員と他の教員では、どちらがより多くサポーターになったか」では、全学年ともに70.1%~72.3%が他の教員の方がより多くサポーターになったと答えた。

考 察

本研究は、開学以来本学が実施してきたアドバイザー制度に対する在籍学生の活用の実態及びアドバイザー制度やアドバイザー教員に対する期待内容を明らかにし、今後の学生支援のあり方について考察することを目的に行った。その結果、70%以上の学生がアドバイザー制度を積極的に活用していないにも関わらず、80%以上の学生が、アドバイザー制度の存続やアドバイザー教員を必要としていることが示された。これらの結果を以下のように解析したい。

1. 学生の背景

本学は社会人入学制度を実施しており、1学年あたり5名~6名の社会人が入学している。1学年80名定員の中には男子学生も入学している。社会人入学生には、一部ではあるが学士取得者、海外生活の経験者、既婚でかつ子どもをもつ学生も含まれており、当然ながら他職種の経験や資格を持っている。

これらの学生集団に対して、アドバイザー制度では、教員1人につき、学生15名を学籍番号順に担当を配分している。担当は基本的に入学から卒業までの3年

間である。但し、学生の留年や国家試験に不合格の学生が出た場合、あるいは教員の退職などの状況の変化によって担当を変更する場合もある。

今回の調査の結果、「サポートを必要とした時に誰にヘルプを求めているか」の問いで「教員」が少なかったのに対して、最も多かった回答は全学年とも「クラスメート」で、次いで「親」、「恋人」、「きょうだい」、「異性の友人」の順であった。学生の多くは未成年で約半数が親との同居である事から、経済的にも心理的にも親の保護を必要としていることが窺える。しかし、学年が進むにしたがって若干数ではあるが、「1人暮らし」の学生が増えていることから、親元を離れて自立しようとする学生にとって、身近な「クラスメート」や「異性の友人」にサポーターとしての役割を期待していることが窺える。また近年、普及が著しい携帯電話やE-Mailなどの情報通信機器を所有する「クラスメート」、「恋人」、「異性の友人」が、彼らの危機やコミュニケーションに24時間素早く対応してくれること、社会人経験のある同級生やクラブ活動の先輩などとの交流が、彼らを支援する要因になっていることが考えられる。

赤塚（1990）は青年期の社会的行動として「青年期の彼らにとって、両親や教師への適応が縦関係への適応であるのに対し、友人への適応は横関係への適応である。前者が権威からの自己解放による自我の自由の独立をめざすもので、いきおい離反的、抗争的色彩を帯びるのに対し、後者はそのような自我の確立を相互に補いあって新しい環境の構成をめざすもので、これは補償的、友好的色彩を帯びるといふ特徴がある」と述べている。

青年期になると友人関係は集団の関係から1対1の親友関係へと変化し、その中で悩みを共有するようになるが、今回の調査結果においても青年期にある学生にとって最も身近でサポートを求める相手は友人であった。ヘルプを求める対象として「教員」が遠い位置に存在していることは発達の視点からもうなづける。

2. アドバイザー制度の活用

アドバイザー制度としてのアドバイザー教員の活用度はきわめて低かった。しかし、「とても・まあまあ活用した」学生は、僅かずつではあるが学年が進むにしたがって増えている。アドバイザーを必要と感じる時として、「勉強」、「進路」、「実習」が全学年とも上位を占めていることから、学年が進むにしたがって、各学年の学習課題の困難さに応じて教員のサポートを

必要としていることがわかる。

アドバイザーを必要とした時期も、1年生では入学時よりも後期が高く、2年生では2年生後期、3年生では、前期・後期ともに高い。この要因として1年生では後期になると学習環境や人間関係には慣れるが、逆にその中に問題を生じる要因ができること、また学習が専門的になってくることで、質問のために研究室を訪問し教員との関わりが増えることが考えられる。健康面で1年生が他の学年より活用度が高かったのは通学や居住地の変化、1人暮らしなどの生活環境の変化が要因として考えられる。2年生では、後期に基礎看護学実習Ⅱが開始されるため初めての臨床実習に対して緊張感が高まる時期であること、一方、3年生を間近に控えているため今後の進路についても関心が高まる時期であること、これらが教員へのサポート欲求を高めると考えられる。3年生で、他の学年に比較して「実習」が高くなっている。これは、5月から12月までのほぼ1年間の主たる学習を臨床実習が占めるため、そこで生じる学習課題の困難度や量、グループメンバーや患者、臨床実習指導者、教員との人間関係など、学生達が遭遇する未知の経験が生む不安や葛藤、問題に対してサポートを必要としていることがわかる。

学生生活における精神的な危機として、神谷らは、大学に入学してから夏休みまでの期間を第一の危機の時期、第二の危機を1年生の後半9月と2月、第三の危機を3年生の前半から4年生の前半と報告している。これらとの比較において、本学の学生がアドバイザーを必要とした時期はほぼ一致している。今後、今回の調査で得られたアドバイザー制度の活用度や活用内容、活用時期を参考にした関わりが必要である。

次に、大学側がアドバイザー制度を決定していることについては、「現行どおり決定していてもよいが、学生が必要に応じて他の教員のところへ行けばよい」という意見が最も多く、次いで「アドバイザーは学生が選択し決める方がよい」であった。アドバイザーを大学側が決定していることで困ったことを自由記述内容でみると、1年生は「知らない人で困った」、「話しくかった」、「あまり親しみをもてない」、「知らない教員に相談するのは気が引ける」、「もう少しどんな教員なのかを知ってから選びたい」など、アドバイザー教員との関係作りをあげている。これは、特に担当教員の授業が1年次に未開講の場合、接触の機会に乏しいため関係作りができにくく消極的になるのではないかと考える。2年生、3年生は、「他に話しやすい教員がいてもいけない気がする」、「アドバイザーによっ

て関わりかたの差が大きすぎるので面接を年に何回かすると決めてほしい」、「教員によっては看護に関するアドバイスがもらえない」、「アドバイザーの専門と自分の相談事が異なる」、「アドバイザーが変更になったときに困った」などをあげていた。

これは、学年が進むにしたがって相談内容が具体的になっていくのに対して、アドバイザー教員の専門性や関わり方の違い、相性などが明確になってくるためここにギャップが生じる。そのため他の教員にサポートを求める機会が増えるが、その際学生たちは担当教員へ気遣いをしながら担当ではない他の教員を訪問していることがわかった。

前述のように、青年期の心的特性として、彼らにとって教員の存在価値は遠い位置にはあるが、教員を必要とする時期や内容をもつ学生がいることは事実である。学生にとって教員は教育環境の一部であり、彼らの人間形成や職業モデルとして重要な影響要因をもって存在している。そのため、学生生活における教員との人間関係は、彼らには重要なキーワードとなる。本学が学生を支援する目的でアドバイザー制度を設置しているかぎりには、その制度が学生にとって肯定的に受け止められなければ目的を果たしているとは言いがたい。今回の調査で、アドバイザー制度を活用しない理由として各学年ともに30%の学生がアドバイザー教員との関係をあげていた。学生を支援するために存在するアドバイザー教員が、その対応の仕方について学生から否定的に受け止められている面は今後検討の必要がある。とかく、教員は、指示命令など学生にとって権威的な存在になりやすいからこそ、常にそのことを自覚し、カウンセリングマインドを持って関わっていく姿勢が望まれる。親しみやすく話しやすいこと、学生が教員を知る機会を設けること、相談には親身になって応じていくなど、本来、教師自身も自覚し努力しているはずのことが学生にしっかり伝わり受け止められるような関わり方の工夫や表現力が必要であろう。

また、「アドバイザー制度は必要か」との問いに対し全学年ともに「とても必要・ないよりはあった方がよい」とする学生が80%を上回った。表7～9に示したように「あまり、まったく活用していない」群においても「ないよりあったほうがよい」「とても必要」と答えた学生は1年生で80%を超え、2,3年生で60%を超えた。必要とする理由としては「いざという時のために」、「担任がないので1人くらい知っていた方がよい」、「アドバイザーがいるというだけで安心できる」など、「備え有れば憂いなし」の諺を象徴

するような回答であった。一方、「必要ない」とする理由は、「必要性を感じない」、「進学・就職時しか必要としない」、「学生が必要と感じるときに自分が選んだ教員のところへ行けばよい」、「忙しそうで気の毒」などであった。つまり、学生達は、友達では解決できない問題が生じたときや、学習や実習、進路など教員の支援を必要とする時、あるいは、いざというときの安心のためにもアドバイザー制度の存続を必要としていることがわかった。

3. アドバイザー教員について

「担当のアドバイザー教員と他の教員のどちらがより多くサポートになったか」については、全学年ともに60%以上の学生が「他の教員」と回答した。また、「コンタクトがタイムリにとれたか」については、全学年が「とりにくい・とてもとりにくい」と回答し、主な理由として「教員の所在が分からない」、「在室時間が分からない」とし、そのほか「忙しくしている」、「部屋に行きにくい」と述べている。

他の教員を訪問する要因としては、担当教員の関わり方に満足できない学生側の心理的側面もあるが、問題をタイムリに解決したい時に担当教員が不在であったりコンタクトがとりにくいなどの物理的な側面も考えられる。特に5月から12月は看護教員が臨床実習指導のため大学から他施設へと終日教育の場を移していることが多い。そのため、学内での学習が主である1年生と2年生にとっては訪問時に教員が不在のことが多々ある。この実状は、今すぐにアドバイスを求めたい学生にとってアドバイザー教員は意味をなさない。このことも、学生が自分の担当アドバイザー以外の教員にサポートを求める要因になっていると考える。

本調査では、大学側が決定したアドバイザー教員について、その活用度や状況を問うものであったが、結果として以下の事実が明らかになった。すなわち、1. 学生は自分の必要度に応じてアドバイザー教員を主体的に選択しアドバイスを受けたいと思っている、あるいはすでに自分が選択した教員にアドバイスを受けている。2. アドバイザー教員には話しやすさや親しみやすさなどの心理的な配慮や積極的な関わり方の工夫に加え、所在を明確に掲示するなどの物理的配慮などが求められている。

4. アドバイザー制度の改善に向けて

学生への関わり方については、各教員のスタンスが

あって当然であり学生の主体性を育成するという視点に立って、学生の活用ニーズに応じているのも現状であろう。また、学生側も一律ではなく「活用する理由がなかった」など、教員との積極的な接触を必要としない学生がいることも事実である。看護系短期大学においては、学生指導や支援の方法として担任制を導入している場合もある。アドバイザー制と担任制の両方を経験した学生に調査を行った神谷らによれば、学生にとってアドバイザー制、担任制ともに差はなかったとしている。結論としては、学生がアドバイザーとしての教員を十分に活用できるためには、教員と学生との人間関係こそが最も大きな要因であると言える。

今後、アドバイザー制がよりよく機能するためには、各学年の特徴や学生個々の期待・希望・欲求に応じてアドバイザー教員の選択が可能になるような方法など、従来の実施方法を検討していく必要がある。以下は試案である。1. 担当する学年については1年次のみを全教員が担当し、主として生活指導、学習指導を行う。このことによって1教員の担当する学生数が少なくなるため、学生への関わりや個別性の把握が容易になる。また、全教員が学年全体の傾向について知る機会になる。2. アドバイザー制機能の推進には、学生との関わりが多く状況把握が容易な学生部が担当する。3. 2年次、3年次は学生の主体性を尊重して学生の選択、求めに応じて各教員が関わっていく。4. 学業に関す

ることは各教科担当の教員が責任をもって指導し、問題状況に応じて学長・学科長のもとで検討し個別指導を行う。5. その他として、教員自身が自分の所在を学生に掲示する配慮、必要に応じた積極的な学生への関わり、話しやすい関係づくりなどが望まれる。また2人部屋の教員も多いため学生はプライバシーの開示をしにくい。このような状況も汲み取って面接室を設置することも必要である。

今後は、教員のアドバイザー制度に対する意識調査も行い、学生との相関を明らかにするとともにアドバイザー教員の役割、関わり方について再確認していく必要があると考える。

謝 辞

本研究にあたって、調査の目的を理解し協力してくれた学生諸氏に感謝致します。さらに、本論作成にあたりご指導をいただきました編集委員長の堺俊明学長、増田芳雄客員教授に深謝いたします。

引用文献

- 赤塚泰三：「青年心理学」，創価大学出版会，p. 198，1990。
神谷和世，深谷志通子，山本よしゑ：短期大学における学生指導体制に関する一考察——1994年度アドバイザー制導入の評価を通して——，聖隷学園浜松衛生短期大学紀要 第19：91-100（1996）。